



母



小城ゆり子

(1)

母は、平成十年九月に肺ガンで亡くなった。それから十四年もたつのに、私はまだ母のことを恨んでいる。

「お母さんのことを恨んでいる」と、精神科の医師が言った。そして、「親孝行しなさい」と説教した。

それ以来、私は親孝行という言葉が大嫌いになった。だいたい、この医者は、外科医だったのに、外科が身体がきつくて大変だからと精神科に替わったばかりだったので、年はとっていても精神科の経験が浅かった。

親を恨むには、恨む原因がある。それを聞きもしないで、つまらない説教をする。人生訓をたれるのが精神科の医者の仕事だと錯覚している。人の人生に踏み込むな。

これはもう三十年以上前のことなのに、私はまだ拘泥している。

母は、世間の人たちみなに、「立派な方」「すてきなお母様」と賞賛されていた。教師だったので、教え子からも慕われていた。母を賞賛しないのは、家族だけである。

母は、おしゃれさんなのだそうである。今も私の洋服ダンスには母のドレスが二、三枚残っている。随分棄てたのだが、何かの折には着て行こうかと思い、残しておいた。が、着ていく折はない。銀行に行くとか病院に行くとかカルチャーセンターに行くとか、そういう折に着ていかないから、結局、着るチャンスがない。ダンスの肥やしである。私は母みたいにふだん、ドレスを着て歩いたりしない。

ふだんドレスを着ていた母は、その下にはぼろぼろの肌着を着ていた。肌着は、外から見えないからと、雑巾にしたほうがいいようなぼろを着ていた。外見だけきれいにして、内側はきれいになかった。着るもののことだけでなく、人に接するときも、外見だけきれいに飾っていた。

ずっと昔、小学生の頃、母がぼろの肌着を着ながら、「ママの下着が上等になったら、うちも金持ちになったってことなんだ」と言っていたので、私は長じてから、母の日に母に下着を贈った。

「だって、ママが小さい頃、そう言っていたから」と言ったら、母は、

「子供ってつまらないことを覚えているもんだね」と言って、喜びもしなかった。

で、私は、母の下着がぼろなのは、家が貧乏だからではなく、母が見えないところにおしゃれをする考えがないせいなのだ、と知った。

下着はどうでもいいが、母は家族には、愛情をもって接しなかった。世間にだけ立派に振舞っていたのだ。

それでも、愛情はあったのだ、と言えるかもしれない。表現方法が下手だっただけなのだ、と人は言うかもしれない。だが、それでいいのだろうか。

私が子供の頃、母はいつも、愚痴ばかりこぼしていた。

「あたしは子供なんか、嫌いだ」と母は言っていた。「自分の産んだ子供だから、しかたなしに

育ててやっているんだ」と、いつも私に言っていた。

「子供なんか、嫌だから、四人目の子は、おろしたんだ。子供は四人もいない」
どうも母は父に相談もせず、中絶したらしい。

「ついでに不妊手術もしてもらったんだ。子供なんかたくさんだ」

四人目の子.....弟か？ 妹か？ 私はその子がかわいそうでならなかった。そして、とても傷ついた。

子供をおろした話など、間違っても子供にするべきではない。

母は、父の姉妹のことを嫌っていた。

父の姉妹.....おヒデ伯母様と京子叔母様。おヒデ伯母様は、父の一番上の姉で、小学校の教師をしながら父たち弟の学費を稼いだ人だった。縁もあったが、嫁入りしなかった。

「おヒデ伯母様は、いい人だ」と母は言っていたが、「いい人だ」と非難をこめて言っていたのだ。「お前はおヒデさんにそっくりだ」と私のことも非難した。

もう一人の叔母、京子叔母様にも似ていると、私は非難されていた。

京子は、怠け者というか、昔の引きこもりというか、とにかく自分の部屋から出ない人だった。自分の部屋で一日中、寝ている。食事も家族と一緒にとはとらない。家族というのは、父母、私たち娘三人、そして京子叔母。父母が共働きしていたので、叔母は「留守番のため」私たちと同居していた。叔母は、家事はしない。何もしないで寝ているのだ。「留守番にもならない」と母は言っていた。が、三女の妹がまだ小さいうちから母が働き始めたので、こんな叔母でも誰もいないよりはましだった。このとき、私たちの村に、保育所はなかった。学齢前の妹を家において、母は働きに出たのだ。それができたのは、京子の存在があったからなのだから、母は京子に少しは感謝してもいいはずだった。が、母は、家事をしようとしないう京子を嫌っていた。

私はしぐさが京子に似ていると、母に嘆かれていた。私も大きくなったら、京子と同じになるのではないかと母は怖れていて、「あたしはそれがわかっていたら、パパと結婚しなかったんだ」と母は小さい私相手にこぼしていた。

次女の私が、自分の嫌いなおヒデや京子に似ていると、嘆く母。私はそれが嫌でたまらなかった。父はどうだったろう？ 母は直接父にこういったことは言っていなかっただろうが、狭い家の中で母が私相手にこう言っていたことを父も気がついていていたのではないかと、姉妹思いの父も、不愉快に思っていただろう。おヒデも京子も、母に対して、嫁いびりしていたわけではない。

サラリーマンなんか、金が自由にならない、貧乏だ、貧乏だ、と母がぶつぶつ言うものだから、子供の私はほんとうに家は貧乏なのだと思っていた。ほしくても買ってもらえないものがそんなにあるわけでもなかったが。

高校生の時、あまりに母が貧乏だとこぼすものだから、考えて奨学金の申請を試みたが、共働きの家庭にはあてはまらなないと、却下された。

しかし、私はなんでこうも母の悪口を言うのだろう？ 母にも、良いところはあったではないか。やさしいところもあったではないか。

世間の人たちが母のことを賞賛するから、それに反発して、母の悪いところばかりを言う。でも、母は、もう存在しない。亡くなって、十四年もたつのだ。そんなに時間がたったら、美しい思い出ばかりになっても良さそうなものなのに、なぜか私は母を恨んでいる。

私は成長してから、精神科医の世話になった。それは母のせいではないが、母が、「お前が病気になったから、私は不幸で」と繰り返すので、私はうんざりしていた。もうちょっと思いやりをもって接してほしいと、思っていた。

今も母のことを考えると、あのぼろの肌着が浮かんでくる。そして、私相手に愚痴ばかりこぼし、娘の私をゴミ箱にしていたと、腹がたつ。子供は感情を持った生き物なのに、ゴミ箱にしてほしくない。父に愚痴をこぼせないで、子供にこぼしていたのだろう。言いたいことは紙にでも書いて、子供に言わなければよかったのに。

こんなことを書いても、私もちっとも気が晴れない。どうすればいいのか、わからない。もっと母を恋する文章を書きたかったのに。

(2)

母は、六十九歳のとき、乳ガンになった。

「あたしは、三人の子にお乳をあげたから、乳ガンにはならないと思っていた」と母は言っていた。「乳ガンは、子供のない人とか、独身の人とかがなると、人が言っていた。だからあたしは乳ガンにはならないと」

乳房のしこりに気づいた母は、婦人科に行って、訴えた。婦人科に行ったのが間違いの元だった。乳ガンが心配なら、外科か、乳腺外科に行かなければならないと、母は知らなかった。婦人科の先生方は母の乳ガンを発見してくれなかった。

「あたしがぶつぶつ言うと、先生方は『じゃ、切りましょうか？』って言うんだよ。切るなんて怖くて、『いいえ、結構です』って逃げていたの」

『切る』というのは、ほんのちょっと切って細胞診をするということだと、母は知らなかった。

二、三年あちこちに行って、やっとM病院の外科、K先生が母の乳ガンを発見してくれた。「先生がじっとレントゲン写真を見ていて、『あ、これか』って言ったんだよ。やっとわかってもらえたとあたしはうれしかったけれど」

すぐに手術になった。

手術のあと、転移しないかと、五年間、病院は調べた。五年間は何もなかったが。

六年目に、肺ガンが発見された。乳ガンから転移したものではなく、原発性の肺ガンだということであった。

母はタバコを吸わない。父も、ずっと前にタバコをやめている。でも、教師だったから、受動喫煙で肺を悪くしたのだろう。この当時、どこの学校の職員室も、タバコの煙でもうもうとしていた。

とにかく肺ガンの手術をした。母は、片肺になった。

そして、父の病気。脳梗塞だった。

父は、めまいがすると、医師に調べてもらった。脳梗塞の発作のあとがある、と言われた。

「一人で郷里に行ったとき、帰りの新幹線の中で気を失ったことがある。そのときはしばらくして、元に戻ったので、気にもしなかったんだが、それが脳梗塞の発作だったんだな」と父は言った。

だが、医師がくれた薬を父は飲まなかった。

「ほら、診療所ってこんなにいっぱい薬をくれるんだよ」と私に薬の袋をいっぱい見せて、おかしそうに笑う。父は診療所に行くだけで、指示された薬は飲まなかった。で、再発して、発作を起こす。入院した。

退院してからは、母と私が薬を飲ませた。が、父は、何度も何度も発作を起こした。

父は八十九歳、母は八十二歳、老々介護はつらいと、母はこぼした。私がすぐ近所にいて、助けてやっているのに、それでもつらいと。

母は父を特別養護老人ホームに入所させようとした。特別養護老人ホームには空きがなくて、なかなか入れない。申し込みだけでもしようとしたが、父は嫌がった。ショートステイも嫌がったが、母が説き伏せて入れた。が、ほんの二、三日だけである。

母は父を入院させたがった。普通の病院はすぐに退院させる。療養型病床群いわゆる老人病院に入院させようとする。当時、介護保険はまだない。老人病院では月に三十五万円かかると言われた。父の年金では足りない。

「子供たちから金をとる」と母は言う。母は貯金をいっぱい持っていたが、なぜかその金は使おうとしない。父は貯金は八十万円しか持っていなかった。「葬式代を貯めるなんて、ばからしいことだ」と言って、ある金は全部使っていた。

「子供からとるって……」私は困った。

「専業主婦なのよ。金は、夫の金なのよ」

母はよその人に言っていた。「亭主の金だって言われた。子供なんて、育てたって、つまらない」

母には娘しかいない。男の子は産まなかった。

嫌がる父を、施設や病院に入れることばかり考える母。そんな母が嫌だった。私がそばにいるのに。

だが、家庭騒動にはならなかった。そうなる前に、父はまた発作を起こし、入院し、病院内で肺炎になって亡くなった。

その直後、母はまた病院に検査に行き、肺が悪いと言われた。

「結核か、肺ガンだっていうんだ。結核ならいいんだけど……」

母は気管支ファイバーという検査を嫌がった。内視鏡を気管支に入れて肺を見る検査である。最初の肺ガンのとき、その検査が苦しかった。だからもう嫌だと駄々をこねた。

医師がどうしてもその検査が必要だと母を説得した。一日検査入院してやりましょうと。

検査の終わった日、私が母を迎えに病院に行った。

病室で待っていたら、検査の終わった母が、麻酔のさめぬまま、ストレッチャーで運ばれてきた。苦しそうにあえいでいる母……弱って、ほんとうにもう老婆としか言いようのない様子だった。死相が現われているというか。

かわいそうなママ。検査がつかつたのね。

麻酔の覚めた母を、タクシーで家に連れて帰った。

だが、いったい何のための検査だったのだろうか？ 後日、検査結果を聞きに、私は母と病院に行ったが、医師は、

「肺ガンです。でも、もうお年なので、私はあなたのお体をこれ以上いじりたくありません。お家に帰って、好きなようにして暮らしてください」などと言った。

母としては、もう手術はしたくないと、断るつもりでいたのだ。が、医師は、八十三歳の母を手術する気はないのだった。

放射線も抗がん剤もしない……そんなに何もしないなら、なんで母の嫌がる検査をしたのだろうか？ 最悪の結果が出て、何もしないなら、初めから検査もしなければいいではないか、と私は思った。

私は母が乳ガンの手術をした後、友人に紹介してもらった自然食の会に入ることを、母に勧めた。宗教を持たない母に、何か心の支えを持たせてやりたかった。私自身も一時、その自然食の会に入っていたが、新興宗教みたいで、高価な健康食品を次々と買わせるので、少々批判的な気持になっていた。

母は自然食の会に入って、玄米菜食を始めた。母は食物科の教師で、戦後、蛋白質、蛋白質、とそればかり言っていたのに、以後、蛋白質信仰を棄て、肉は食べなくなった。

「魚を食べ過ぎるって言われるんだよ」と、母は、その会のことを言っていた。「薬を飲むなって、降圧剤を飲むなって言うんだよ。あたしが、でも血圧が二〇〇もあるんですって抗議しても、二〇〇あってもいいから降圧剤は飲むなって」

母は、薬はやめなかった。

肺ガンと言われ、医師にさじを投げられて、母はガン関係の本を次々と読んだ。そして、O先生を知った。

O先生は、代替医療に関心を示している先生だった。（代替医療とは、現代医療のほかの、健康食品やその他の方法による民間療法のことである）電車で片道三時間もかけて、O先生の病院に行く。母一人では心もとないので、私がついていった。

「あたしはガンは克服しました」と母はO先生に言う。

レントゲン写真を見て、ガンとわかるが、先生は何も言わなかった。黙って母を受け入れ、漢方薬を出してくれた。いろいろな薬草を煎じて飲む……健康保険が効かないので、高くかかった。

。そうして、母は、鴨川の有機栽培農場を調べ、そこから無農薬野菜を取り寄せるようになった。玄米菜食のゲルソン療法。にんじんと青野菜のジュースを飲む。野菜の繊維が壊れないよう、特別なジューサーを手に入れる。そのジューサーで野菜ジュースを作るのは、私の仕事になった。

。また、ガンの薬だと言って、健康食品、サメの軟骨も飲んだ。

すべてお金のかかることだった。母の世代はまだ年金が多かったので、長年教師をしてきた母の年金で、どうやらまかなえた。

そうやっているうちに、母はガンはなくなったと考えるようになった。

「あたしは、ガンは克服したんだ」と、勝手に考える。いろいろなことを、すべて自分に都合のいいように解釈して、ガンはなくなったと思っていた。ガンはあっても、しばらくは身体はなんともない。骨に転移して、背中が痛むようになるまでは。

降圧剤を出してもらっていたI診療所の先生にせがんで、痛み止めのため、整形外科への紹介状も書いてもらい、整形外科に行ったが、そこではほとんど相手にされなかった。

なおも痛い、近所の外科に行く。

「T外科の先生は、あたしが痛いと言ったら、すぐに痛み止めをくれたよ。I診療所なんて、あちこち検査ばかりして、そのあげくガンだ、ガンだって言ったのに。なんだねえ、この年になってもわからないことってあったんだね」

しかしその痛み止めを飲んでも、痛みは消えなかった。

「M病院の先生は、暗い顔をして、ガンだ、ガンだってあたしをいじめるんだよ」と私に訴える。私は黙って聞いていた。

サメの軟骨をガンに効くと言って売っていた医師が、逮捕された。新聞記事でそれを読んだ。

「誇大宣伝したんだろ」と母は言う。

「誇大宣伝じゃない。ガンに効くって言って売ったのよ」と私が言うと、母は奇妙な表情を浮かべた。

「サメの軟骨なんて、気休めよ」

「ガンの薬だよ」

「そんなの、高価なだけで効かない」

「だってガンがないじゃないか」

母は自分にガンがないと言う。身体の中のガンは、目に見えない。

あるとき、夕方、母はお腹が痛いと言って苦しんだ。尋常の苦しみ方ではない。その当時はI診療所が夜も診療していたから、連れていった。先生は痛み止めをくれて、明日の朝M病院に行くようにと指示した。

で、明朝、M病院で、検査し、卵巣濃腫とわかった。即手術。

「ガンかどうかはわかりませんが、切ってみてガンとわかっても、拡大手術はしません。もうガンの手術のできる時期は過ぎていきますから。ただ、激痛を訴えておられるので、卵巣を切ります」と、外科の先生は言った。

ガンではなかった。

「そうだろう？ 腫瘍マーカーの値が高い、高い、ガンだ、ガンだってあたしを苦しめて。ガンじゃなかったんだろ？」

「ええ、ガンじゃなかったわ」

「良性の腫瘍でも、値は高くなるんだろ？」

「そうです」

「よく調べもしないで。これがあったから、腫瘍マーカーの値が高くなったんじゃないか」

母は気管支ファイバーの検査をしたことは、都合よく忘れていた。自分はもうガンは克服し

たと、思っていた。

私もガンになった。子宮ガン検診でひっかかったのだ。自覚症状は何もなかった。ガンが怖くて、半年毎に検診に行っていたのだ。検診に行った婦人科の先生に、「もっと大きな病院に行ってくわしい検査をしてもらってください」と言われた。大きい病院……市立病院に行ったら、すぐ、「子宮体ガンです。三日後に入院、五日後に手術」と宣告された。

「ガンだって言われたの」と泣く私に、母は、

「ごめんね、ガンなんか遺伝させて」と謝罪した。ガンは、遺伝だろうか？

「明日、家族と一緒に来てほしいって言うの」

「そう。あたしが行くよ」

母は私についてきた。

病院の待合室で、順番を待つ間、母は背中が苦しくなったようで、待合室のソファーによりかかって倒れていた。

「大丈夫ですか？」と看護師が訊く。

「あたしは付き添いなのに、そのあたしの方が心配されて」と母は言ったが、ほんとうに苦しうだった。

私の入院中に、母は倒れた。

心配して電話をかけた私に、妹が、「ママを、M病院に入院させるわ」と答えた。妹は、母の面倒をみていた私が入院したので、代わりに母の許に来ていたのだ。

私の手術には、夫と姉が付き添ってくれた。手術は無事に成功した。

「子宮筋腫のでっかいのがでんと座っていて、ガンがリンパ腺に行くのを阻止していたんだ。だからリンパ腺は手術しないで済んだ」と医師が告げた。「子宮と卵巣はとった。卵巣から出るホルモンが悪い働きをするんでね」私は女性器を失った。もう閉経していたから、どうってことないのかもしれないが、やはりショックだった。

退院して、一週間ほど自宅療養し、母のいるM病院に見舞いに行った。母は割と元気だった。

「老人保健施設に転院するよう言われているんだよ」

「そう？ よかったね」

しかし、老人保健施設には行けなかった。体中が痛いと訴える母を、医師は四人部屋から二人部屋に移し、モルヒネの点滴を始めた。

ガンはなくなったと主張していた母なのに、入院先の医師からまたもガンの告知をされ、いったいどういう気持だったろう？ あきらめの境地だったのだろうか？ どういう気持か訊きたかったが、かわいそうで訊けなかった。

モルヒネを打ちだしてから、母の容態は急速に悪化の一路をたどった。ベッドから起きられず、寝たきりとなった。もう何も言わなかった。

姉が名古屋から来て、母の世話をしてくれた。

その姉が嫁ぎ先の名古屋に帰ってから、母が妙なことを言った。

「Mさんがあたしの世話をしてくれたんだね。Mさん、どこへ行ったの？」

Mさんというのは、近所の母の友人である。姉は別にMさんに似てはいないが、母はMさん

と思ったようだった。

「名古屋に帰ったわ」

「そう？ Mさん、名古屋の人と再婚したの」

モルヒネでおかしくなったんだらうか？ 姉がわからないなんて。

夜、病院から電話があった。「お母様が危篤なので、来てください」

深夜だが、名古屋に電話した。

「一番の新幹線が来たら、来て」

妹も駆けつけた。

しかし、その夜は何もなく、姉も間に合った。

次の日、娘三人で母の許につめていて、夕方、「もう私が見ているから」と姉が言うので、私と妹は家に帰った。

家に帰ったら、姉から電話があった。母が亡くなったという。もうちょっと待っていればよかったかな、と思った。

また病院にとってかえして、葬儀社と親戚に電話した。あわただしい日々が始まった。

母の遺産相続。

父のときは、父のものは全部母に上げようと娘三人で一致したので、問題なかった。父の場合、なにしろ預貯金は八十万円しかなかったし、後は父母の住んでいた団地の一室だけであった。それが母のものになったので、母の遺した不動産は、その一室と、私たち夫婦が住んでいる一室、妹たち家族が住んでいる市川市のマンションの一室、あと北軽井沢に小さなセカンドハウスがある。母は生前、自分たちの家と私たちの家は私が、妹の家は妹が、北軽井沢は姉が相続するように言っていた。遺書として書き残したわけではないが、私たち三人が集まったときにそう言っていたのである。

預貯金がかれこれ一千万円近くあった。三人で話し合っ、二百五十万円ずつ分けて、後はセカンドハウスの維持費にプールすることにした。姉が相続した家だが、名古屋の姉はあまり北軽井沢には行かないという。利益があまりなくて、維持費ばかりかかる。プールした維持費がなくなったら、そのときはまた考えようということになった。それにしても、貧しい教員が随分遺したものであった。

亡くなったとき、母は八十四歳であった。それからもう十四年たつから、あのとき亡くなっていなくても、今はもう生きていないだらう。亡くなった人のことは、美しい思い出ばかりになっていればいいのに、私はまだ母を恨んでいる。